Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

015

関信三の保育観

導　寺　信　子
三篠幼稚園、安田女子大学大学院博士課程

1．研究の目的

日本で初の公的に認知された幼稚園である東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園初代監事(現園長)となった関信三(1843ー1879)の経歴を知り、筆者は、彼が残りの人生に於いて幼児教育に全身全霊をかけた保育観とは一体何であったのか知りたいと思うようになった。関信三の保育観によって、現代の幼児教育の歴史的課題を究明する手がかりができるのではないだろうか。

2．研究の方法

関信三の経歴が特殊なため、経歴を考察する必要がある。そして、その経歴によって関信三に関わった人物が影響を与えているので、その人物についても検討していく必要があると思われる。関信三は、当時の幼児教育の第一人者であるフレーベルの幼稚園を参考にして我が国に幼児教育を取り入れることになった。そのため、関の著書は、フレーベル主義的幼稚園の翻訳本であり、関自身の保育観が明らかになっている著述は極めて少ない。そこで筆者は、今回の論文発表において３つの関信三の保育観が現れている著述を基にして、保育観を導き出したい。

3．関信三の経歴

関は、37歳という短い生涯ではあったが、晩年に於いて日本初の幼稚園の園長として貴重な幼稚園の手引書や、幼稚園教諭の育成に力を注いだ功績は計り知れない。関信三と名乗るまで、猶龍、安藤劉太郎、関信一郎、関信太郎、関信吾など複雑な経緯があることを踏まえることが必要である。そのため、経緯を追ってみたい。「関は、天保14(1843)年正月20日、三河国幡豆郡一色町の真宗大谷派安休寺第22世、雲英元了の五男一女の末子として生まれ僧侶の名で猶龍と呼ばれた。雲英家は、優秀な学者を輩出している家系であり、猶龍もまた、12歳で京都の真宗大谷派高倉学寮(現大谷大学)に懸席。元治元(1864)年には最高位の寮司となった」[2] 時代は、幕末から明治へと大変革を迎え、価値観が大きく変化した。新政府にとって、幕府体制時代に保護されていた仏教は、邪魔であり、神道国家として統一するため、慶応4(1868)年3月、神仏分離令を出す。それにより、多くの寺が打ち壊され、本尊は持ち出され焼かれた。新政府は、仏教と同様にキリスト教を弾圧した。そのような時代背景の中、猶龍は、仏教存亡の危機にキリスト教探索、諜者として、氏名を変えながら、真宗大谷派、仏教界のために力を尽くした。「明治2年（1869）秋長崎より大坂に移り洋学校入学し、宣教師ペキロについて耶蘇教探索に励んだ。明治3年(1870)本願寺法主の家従に登用され、姓名を安藤劉太郎と改めた。その後浅草本願寺納戸役松井某に事を謀り、同年秋横浜に寓居の米人ジョンバラ氏について英学を修めた」[3]「後の上司となる東京女子師範学校附属幼稚園摂理(現校長)となる中村正直と横浜にあるアメリカン・ミッションホーム（亜米利加婦人教授所）とよばれる子どものための教育施設で出会ったのも諜者時代だった。明治5年夏、海外事情視察のため、東本願寺法嗣現如に随行を命ぜられたが、洋行中、明治6年2月24日、キリスト教が解禁された」[4]「明治8年(1875)1月4日帰朝し東京に居住した。同年2月姓名を関信三と改る。……明治9年(1876)7月『幼稚園記』四巻を訳編して東京女子師範学校より刊行した。この書は幼稚園に関する我が国の最初の書物で、初期幼稚園の基礎を作ったものである。……明治9年(1876)11月16日東京女子師範学校内にわが国最初の幼稚園が開園され、関はその初代の監事(園長)となった。……明治11年(1878)4月田中不二麿文部大輔の内命によって『幼稚園創立之法』を草して提出し、同年5月稟申書を中村正直摂理(校長)に呈して保姆練習科を幼稚園内に開設すべき必要を論じて、同年同科の開設を文部省より裁允せられた。……同年12月『幼稚園創立之法』を文部省教育雑誌に発表、次いで明治12年(1879)3月『幼稚園法二十遊嬉』を訳編して青山堂より出版した。……関は女子教育幼児教育者として活躍したが、おしくも明治12年(1879)11月14日病没した」[5]以上が関信三の経歴である。関の生涯の大部分は僧侶としてであったが、病没するまでの4年間が、日本初の幼稚園園長として幼児教育に残りの人生を捧げた人物であったといっても過言でないと思う。

関は、初代園長に迎えられ、幼稚園のための訳本を後世に遺したり、保姆養成に力を注ぎ功績を残している。その都度、関を引き上げてくれる人物がおり、人

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

に恵まれていたのではないだろうか。

たとえば、東京女子師範学校附属幼稚園において、初代の園長に就任することについては、上司の中村正直は、諜者時代では、敵対関係であったのにも拘らず園長の任に就いている。それについては、「田中不二麿は関信三とは同じ愛知県人であったことから、彼には少なからず心を寄せていた人であり又時を同じくして欧米教育視察をしてきた人でもあった。若き彼を陰ながら支援してきた一人でもあった」(6)と指摘されている。三条や田中が当時の教育界に影響力を持っており、恐らくそのような関係があって、関を附属幼稚園の園長に起用したのではないかと考えられる。太政大臣の三条実美は、関信三の太政官諜者時代の上司であり、渡辺昇もまた弾正大忠であり、上司であった。

東京女子師範学校附属幼稚園の開業式典の際に関と渡辺が再会した。その結果、「当時大阪の知事であった渡辺昇が附属幼稚園を参観した結果、是非大阪でも、これを開始してみたいと思った。……大阪から保育見習のために……氏原張・木村末の両人が上京することになった」(7)のである。太政官諜者時代の上司と再会し、互いに幼児教育の発展に協力することになった。このことは、歴史的に重要な意味があるように考えられるが、今後の課題としたい。

4．関信三の保育観

一つ目は、関の経歴で取り上げた大阪に幼稚園を設立するために保姆見習として、関を頼って、派遣された氏原は、次のように述べている。「幼稚園でけがをなさった、大した事ではなくて、一寸膝をすりむいた位であったのに、執事が大層おこって来て、……関先生はお体のお弱かった方ですが、……御自分でお邸にでかけて……幼稚園に来てお友達と遊んで、少し位はすりむく方がいい、それで無ければ幼稚園にいらっしゃった意味がない」(8)もちろん関は、幼児教育の先駆者であるため、個人的な幼児教育的思想ではなく、国家のための幼児教育を目指していたと彼の経歴から見れる。しかし、園長としての実践において、氏原の表現にあるように、個人的な苦情に対して、毅然とした態度で接し、幼稚園生活において、幼児が体験を通して自分で問題を解決することが、成長発達となると示唆した。

二つ目は、『幼稚園記』の中に、「徳行及ヒ宗教ノ妙域ニ兒女輩ヲ誘引スルヲ得ヘシ是レ豈良心教育ノ一基本ナラスヤ」(9)とあったが、原文は、“It is one of the greatest blunders of educators, to enjoin duties and to preach moral truths to children of so young an age that their acquaintance with life and its obligations must be very limited. Children are, in this way, obdurated to the charms of morality and religion.”(10)とあった。関の翻訳に原文とのずれがある。関は、幼児の良心教育に道徳と宗教教育が基本の一つと強調的なのに対し、フレーベルは、幼児期において、道徳と宗教教育は度を越さない程度にした方がよいと消極的な言い回しになっている。幼児教育に情緒発達のために宗教教育の必要性をフレーベルよりも強調していることは、関の宗教教育への思い入れの深さが見えるのではないだろうか。

三つ目は、『幼稚園法二十遊嬉』の中で、「幼稚ノ教育ニ至テハ唯冥々ノ中ニ其益ヲ得ルモノニシテ其得否ヲ認了スルコト最モ難シ故ニ之ヲ学童ノ教育ニ比スレハ無形中無形ト云モ可ナリ」(11)とあり、幼児教育の保育効果は、小学校の教育とは違って、知識を習得させることに重きを置くことでなく、目に見えない訓育面情緒面を養うことであるため一般の人には理解されにくいと述べてある。目に見える保育を求めるのでなく、関は、幼児保育は、草木の地中にある根っこを育てるようなものではないのか、目に見える保育を求めるのでなく、関は、幼児保育は、草木の地中にある根っこを育てるようなものではないかと語っていると筆者は理解したのである。

5．結論

関の保育観は、目に見えるものを追うのではなく、心的な情緒の成長発達を目指す保育であったという結論に達した。情報過多の現代に、幼児の基礎を養う援助に徹する保育が、最も大切だと改めて気づかされたのであった。

注

(1) 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房, 2001, p. 157.
(2) 日本幼稚園協会『幼児の教育』「幼稚園の誕生」(国吉栄)フレーベル館, 平成 12 年 4 月, 5 月号より抜粋
(3) 本浦廉平『一色町誌』一色町誌編纂委員会, 昭和 45 年, p. 736.
(4) 日本幼稚園協会, 前掲書, 平成 12 年 10 月, 12 月号より抜粋
(5) 本浦廉平, 前掲書, pp. 737-738.
(6) 織田顕信『同朋大学論叢 27 号』昭和 47 年, p. 79.
(7) 津守真, 久保いと, 本田町子『幼稚園の歴史』恒星社厚生閣, 昭和 34 年, p. 117.
(8) 同上書, p. 131.
(9) 岡田正章『明治保育文献集第 2 巻』日本らいぶらり, 昭和 53 年, pp. 37-38.
(10) Dr. ADOLF DOUAI, “The Kindergarden” E, Steiger, 1872, p. 13.
(11) 岡田正章, 前掲書, p. 390.

NII-Electronic Library Service